鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学・社会科学編 第3号 2020

地域による子育て支援としての孫育ての可能性
－親子関係と主観的幸福感からの祖父母の意識の検討－

杉山　佳菜子、小川　真由子[1]、榊原　尉津子[2]

要旨

研究１では NHK すくすく子育てにみる子育て世代の子育ての疑問から地域の祖父母による孫育ての可能性を探った。番組に寄せられた疑問は一般的な悩みではなく、個別の相談事例が多く、じっくり相談に乗ることのできる祖父母の活躍の可能性が示唆された。

研究２では、44 歳～83 歳までの（平均年齢 68.6，SD＝8.16）の 71 名（男性 29 名、女性 42 名）に対し、「孫が不自由なく暮らしている場合」「孫の両親が共働きの場合」「孫家庭が経済的に苦しくなった時」「孫が片親になった時」「親の育児能力に不安がある時」の 5 つの場面での祖父母による孫育ての必要性を質問した。その結果、「親の育児能力に不安がある時」を除くすべての場面で「親が必要とすれば必要だ」とする回答が多く、孫育ては両親の意見を尊重する態度がうかがわれた。また、一貫した傾向は見られなかったものの、祖父母世代と子世代の親子関係よりも祖父母世代の主観的幸福感が孫育てに対する態度に影響を与える可能性が示された。

キーワード

孫育て，親子関係，主観的幸福感，祖父母，子育て支援

１．本研究の背景

共働き家庭の増加傾向に伴い、保育園のニーズは年々高まっているが、それに対し乳児や低年齢の幼児の保育所不足や保育者不足が深刻な問題となっている。平成 27 年度より「子ども・子育て支援新制度」を施行し、定員 19 人以下の「小規模保育」や、保育者の自宅で行う「家庭的保育」を新しく認可事業とするなどして、保育のサービスを充実させており、子どもを預ける場所の選択肢は増えているものの、保育現場の働き手の数は依然として問題となっている。

そこで注目されるのが地域の高齢者の存在である。日本の平成 30（2018）年の高齢化率は 28.1%（内閣府，2019）とおよそ４人に１人が高齢者である。高齢社会の日本にとって、高齢者施策をすすめることもまた急務の課題と言える。これまでに家族社会学や社会老年学といった諸分野において高齢者の主観的幸福感の研究が数多くなされてきた。主

[1] 鈴鹿大学こども教育学部　養護教育学専攻
2 高田短期大学子ども学科

観的幸福感で指摘されるのが「生きがい」の有無や「生活の質」の良し悪しである。そしてそれらに影響を与えると考えられるのは「役割があること」である。たとえ年に数回であっても、孫や子ども夫婦から頼りにされ、孫育てをすることは、高齢者の主観的幸福感に影響を与えられると考えられる。また、自分の子どもを育てた経験のある高齢者もいることから、その知識を活用して子育て支援に携わってもらうことは、高齢者施策としても有効だといえる。

２．祖父母の孫育ての現状

実際に子育て世代は誰を頼りにしているかについて、2005 年に内閣府が行った国民生活選好度調査によると、15 歳以上 50 歳未満で子どものいる女性の 60%以上が自分の親を頼り、次いで公的な子育て支援サービスを頼っており、子育て世代における祖父母の存在の重要性がうかがえる。また、NHK で放送されている「すくすく子育て」の調査によると、実際の子育てのサポート者は妻の父母 57%、夫の父母 44%、保育所 30%であり、上

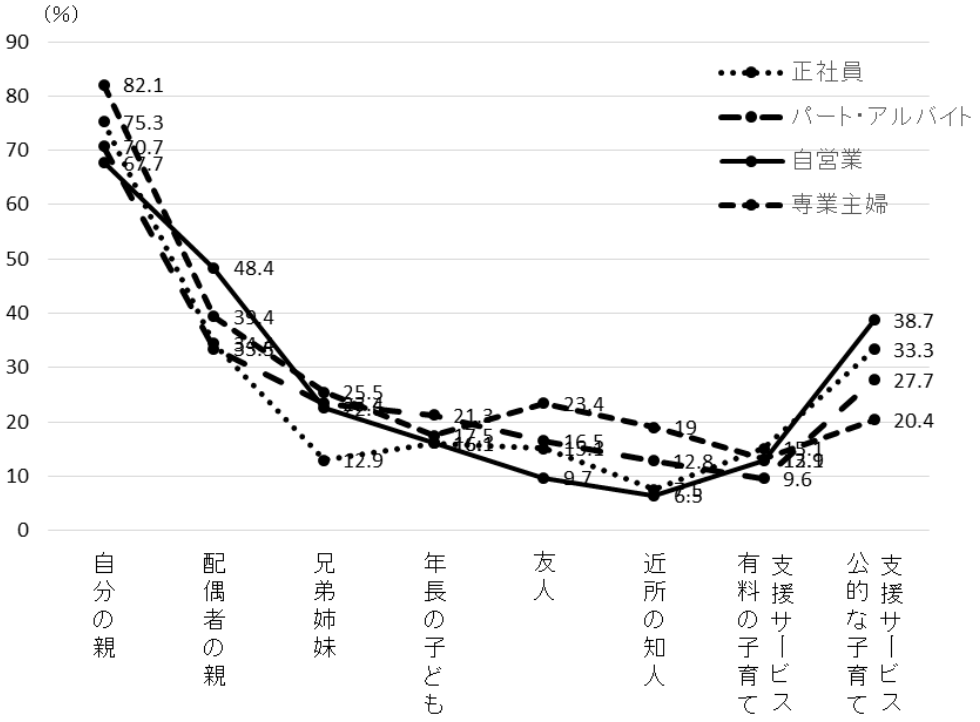

図1　妻の就業形態別子育てを頼る相手

資料：　内閣府「国民生活選好度調査」（2005 年）、（「平成 17 年版国民生活白書」から引用）
注 1：「子育てに手助けが必要な場合、あなたは誰を頼りますか。次の中から当てはまるもの全てをお選びください。お子さんがいない場合、もしいたらと仮定してお答えください。（○はいくつでも）」と尋ねた問に対して回答した人の場合。
2：選択肢はほかに、「その他」。
3：「有料の子育て支援サービス」とはベビーシッターなど、「公的な子育て支援サービス」とはファミリー・サポート・センターなどを指す。
4：回答した人は、全国の 15 歳以上 80 歳未満の男女であるが、ここでは 15 歳以上 50 歳未満で子どものいる女性のみを集計、588 人（「役員」、「学生」、「無職」、「その他」及び無回答を除く）。「その他」は記載を省略。

記の結果と同様の傾向が示された。さらに、子育て世代の“頼りにしている人”の調査では妻の父母 50%、友人 13%、夫 10%という結果であり、子育てをしている娘を持つ祖父母世代が最も孫育てで活躍していることがうかがえる。

一方で、平成 28 年の国民生活基礎調査では、三世代家族が全体の 5.9%であり、祖父母が日常的に孫と関わっているケースよりも、子ども世帯が必要とする時に必要とする支援を行っている家族が多いことが予想される。

実際に地域の子育て支援の一環として“孫育て”を行いはじめた団体や自治体もある。千葉県柏市の高柳・風早南部地区の民間団体「地縁のたまご」では、多世代交流の場を設け、地域で子育てをする取り組みをしている。横浜市神奈川区の NPO 法人「親がめ」では、ボランティアとして子どもたちと向き合うシニアを「公共じいちゃん」「公共ばあちゃん」と呼び、町内会館や商店街の空き店舗、保育所など区内の様々な場で、多世代交流会を開いている。愛媛県は、自治体の支援策として県民運動を展開しており、四国中央市ではシニアによる子育て家庭への訪問事業や今治市では「シニアアシスタント」制度を設け市内の保育所などにボランティアとして出向いている（NIKKEI STYLE，2014 年 2 月 19 日版）。このように地域における“たまご（他孫）育て”の取り組みも広がりつつあると言える。

３．孫育てが祖父母世代に与える影響

Erikson（1950）は人の生涯を 8 つのステージに分け、それぞれのステージに課題があり、この課題を達成することで人は成長していくことができるという考え方を提唱した。Erikson は中年期の課題を Generativity（生殖性）だとし、次の世代の若者を育てることが課題となっていることが理論的に示されている。

実際の研究では、杉井・泊・堀・早川・又賀（1994）で、孫との関係が祖父母の「有能感」や「生活満足感」に影響していること、特に祖母が孫育てに関わる遊びやしつけ、教育をとおして喜びを感じている点を指摘している。小野寺（2004）は孫と別居している祖母が身体的支援の量ではなく、アドバイスや励ましをするなどの精神的支援が多くなされるほど、主観的幸福感が高くなることを示している。

山崎・草野（2002）でも、孫育てを好意的に受け止め、生きがいとする祖父母が多数であった。その一方で同時に、孫育ては祖父母に疲労感を与え、距離を置いて温かく見守りたいといった姿勢も見られている。北村（2008）では幼い孫と近居し、孫の子育てをより多く支えている若い祖母では、孫の子育て支援に必ずしも積極的ではなく、身体的疲労を感じている人が少なくないという結果がみられ、久保・田村（2011）でも祖母と孫との居住地が近いほうが祖母の QOL は高いが、孫への育児支援の負担も大きいという結果が得られている。このように、祖父母による孫育てはポジティブな面とネガティブな面があることから、「公共」の祖父母のサポート等の、現代に適したシニアと子育て世代、子ども

という三世代の地域での巻き込み方を考え、実践していくことで、それぞれの社会関係が豊かになっていく循環が期待されている（森田，2017）。

４．本研究の概要

前述のように、子育ての支援者として祖父母世代が頼りにされており、地域における“たまご育て”は祖父母世代であるシニア世代にはよい影響があることが示唆されているが、子育て世代からのニーズがあるのか、また子育て世代の抱える問題の解決になるのかについてはっきりとした知見が得られてはいない。そこで研究１では、NHK「すくすく子育て」の番組で取り上げられた母親からの質問内容から検討することとする。

研究２では、祖父母世代の孫育て観を調査する。多くの研究は実際に孫育てを経験している祖父母を対象にしているが、本研究では孫育てを経験していないシニア世代も含め、経済状態や子ども世代との親子関係、主観的幸福感から「孫育て観：グランドペアレンティング観」の違いを明らかにする。どのような要因がグランドペアレンティング観を高めるかについて明らかにすることで、地域による“タマゴ育て”事業の仕組みづくりに役立つと考える。具体的には経済的余裕と人間関係の円滑さ、主観的幸福感が高い者は自らの生活に余裕ができるため、Generativity の課題を解決する余裕が生まれ、孫育て観も高くなると考える。

５．研究１：子育て中の母親の悩みと“タマゴ育て”の可能性

（１）目的

研究１では、子育て中の母親が抱える子育ての疑問を、ＮＨＫ「すくすく子育て」の番組で取り上げられた母親からの質問内容を分析する。さらにこの結果をもとに、祖父母世代が子育ての支援者として活躍する可能性について検討する。

（２）方法

ＮＨＫ番組学術利用トライアルを利用し、「すくすく子育て」の 2003 年４月 11 日～2018 年 9 月 22 日放送分の全 677 回の放送の中から、「質問スペシャル」などの視聴者から寄せられた回全 39 回の放送を閲覧し、質問の内容を拾った。

（３）結果

番組では、238 件の質問が取り上げられていた。その内容を、「育児方法」「保護者・養育者の悩み」「保健・衛生」「発達の不安」「教育方法」の５つのカテゴリーのいずれかに分類した（図２）。

最も多かった質問のカテゴリーは「なかなか寝ないが、どうしたらいいか。」「爪をかむ癖がやめられない。どうしたらいいか。」「泣いたときはそのままにするべきか。すぐに抱っこした方がいいか。」「どうやって叱ったらいいか。」などの「育児方法」であった。質問の内容はかなり場面を限定した具体的なものが多かった。例えば、寝かしつけの

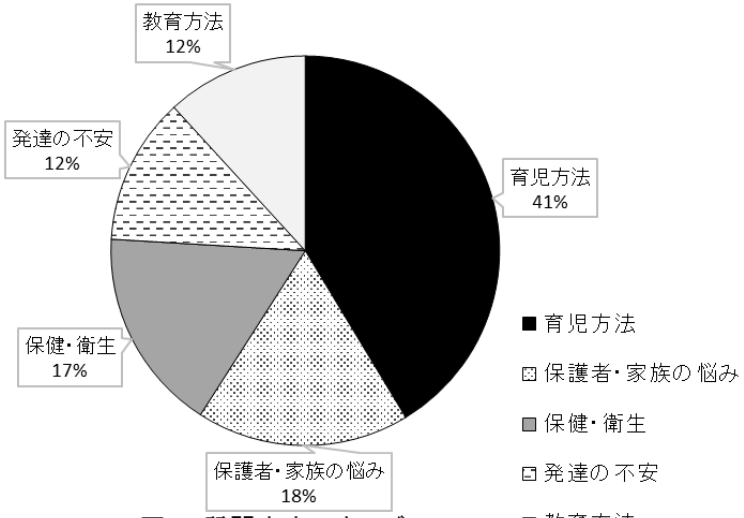

図2 質問内容のカテゴリー

質問では、インターネットで情報を得て、すぐ寝ると評判の音楽をかけているが効果がないので相談しているという母親や、料理をほとんどしたことがない母親の離乳食の作り方など、育児書などに書かれているような一般的な対処法ではなく、“うちの子の場合はどうなのか”“私の場合はどうしたらいいか”という質問であった。

次に多かったのは「子育てのイライラはどうしたらいいか。」「パパが自分優先すぎる。どうしたらいいか。」「社会復帰のタイミングはいつがいいか。」と言った、「保護者・養育者の悩み」であった。中には、祖父母からの育児参加の方法について、ママ友との付き合い方について、妊娠時に気を付けておくべきことなども含まれていた。養育者は子どもの養育方法だけでなく、自分自身のことについても多くの不安を抱えていることがわかった。

「保健・衛生」には「日焼け止めを塗った後のケアは？クレンジングは必要か。」「嫌がる子どもへの上手な薬の飲ませ方は？」「虫歯にならないおやつの選び方」などを分類した。その他、「被災時に哺乳瓶などを消毒できないときはどうしたらいいか。」「災害時、離れた場所にいる子供が心配。どのようなケアがいいか。」といった、防災に関わる質問もいくつか寄せられていた。特に、大きな災害があった後に質問が集中していた。

「発達の不安」には、「ハイハイできないのにつたい歩きをする。発達的に大丈夫か。」「怖かったことをずっと覚えているものか。」「母乳とミルクで成長に違いが出るか。」などを分類した。育児書に書かれている定型発達の順序や時期にマッチしない発達をしている子どもの質問や、子どもの能力に関するもの、発達にまつわる噂のようなものの真相を確かめる質問が寄せられていた。発達障害に関する質問は取り上げられてはいなかった。

「教育方法」には「習い事をさせたほうがいいのか。早ければ早いほうがいいのか。」や「保育園と幼稚園で学力差があるのか。」「子育てに信念があった方がいいのか。」などを分類した。習い事や知育玩具に関してなど、0歳児の養育者からも質問があるなど、教育に対する熱心さが伝わってくる質問が多かった。このカテゴリーの質問内容は、世間で〇〇が良いということを聞くが、本当か、のような、噂の信憑性を確認する質問も多かった。

（4）考察

最も多く寄せられた質問のカテゴリーは「育児方法」であったが、今は育児書も様々な種類が出版されている上に、インターネットにアクセスすればすぐに欲しい情報にアクセスできる環境であり、親や友人にも簡単に連絡が取れ、質問することもできる。この様な状況でも「育児方法」の質問が多く、その中でも「寝かしつけ方」「叱り方」などの基本的な質問が寄せられる背景には、情報が過多であり、自分に合った情報にたどり着きにくくなっていることや、自信で試行錯誤するよりも簡単に解決策を手に入れようとする傾向が考えられる。「教育方法」のカテゴリーに分類した質問に噂の信憑性を問う質問が多かったことも、情報が過多であるがゆえだと考えられる。また、育児方法や発達の不安の質問に多く見られた具体的で場面を限定した質問からも、一般的な解決策ではなく、自分に合った情報を得たいという傾向がうかがわれる。

また、発達相談や医療的な知識が必要な質問もあったが、「遊びのレパートリーを増やしたい」「“おまる”と“補助便座”はどちらを先に使用するのか」のように必ずしも専門家でなくても回答できる育児方法に関する質問もあった。さらに、質問後に明確なアドバイスが得られなくても「話を聞いてもらってすっきりした」「認めて（やり方を肯定して）もらってがんばろうと思えた」というような、話をすることによって解消される場面もあった。

以上のことから、子育て中の母親が抱える悩みは祖父母世代が寄り添い、話を聞き、支援することで解決することが多いと考えられる。多くの悩み相談でそうであるように、相談者のタイプや状況によって対処方法も異なるため､直接対面して相談にのる必要がある。したがって専門家に質問しなくても、経験とエネルギーのある祖父母世代がじっくり話を聞くことや、訪問してアドバイスすることで子育て世代の悩みを解決する可能性が十分にあると考えられる。孫を預かる等の身体的・物理的サポーターのみならず、多世代交流の場の活用や“たまご育て”等の祖父母世代の孫育てが、子育て世代の精神的サポーターとなりうる可能性を十分に示唆しており､子育て世代のニーズにもマッチしていると言える。

６．研究２：祖父母世代の孫育て観について

（１）目的

研究２では祖父母世代の孫育て観の違いを経済的余裕、人間関係の円滑さ、主観的幸福感から検討する。

（２）方法

１）調査協力者

三重県が主催する講座「孫育てのすすめ－最新の保育事情と祖父母活躍の場－」に参加した県内在住の 44 歳～83 歳までの（平均年齢 68.6，SD＝8.16）の 71 名（男性 29 名、女性 42 名）。年齢と性別の分布を表１に示す。

表１　調査協力者の属性（人）

	40代	50代	60代	70代	80代	不明	合計
男性	0	0	8	14	5	2	29
女性	2	7	17	13	2	1	42
合計	2	7	25	29	7	3	71

２）調査時期

2019年８月。

３）質問項目

フェイスシート

性別と年齢の他、家族の経済状態と孫育ての経験について質問した。家族の経済状態については「裕福だ」「不自由はない程度だ」「なんとか暮らしている程度だ」「とても苦しい」から回答を求めた。孫育ての経験については「かなりしている」「少ししている」「ほとんどしていない」「していない」「孫はいない」から回答を求めた。

孫育て観

「あなたは次の状況でどの程度祖父母が関わるべきだと想いますか」という質問し、A．孫が不自由なく暮らしている場合、B．孫の両親が共働きの場合、C．孫家庭が経済的に苦しくなった時、D．孫が片親になった時、E．親の育児能力に不安がある時の５つの場面を設定した。それぞれ「親が必要とすれば」「親が必要としなくても」「孫が必要とすれば」「関わる必要はない」の４つの選択肢から回答を求めた。

子どもとの親子関係

杉山（2009）で使用した親子関係尺度10項目について、「かなりそう思う」から「全くそう思わない」までの５件法で回答を求め、順に５点から１点の得点を与えた。

主観的幸福感

伊藤・相良・池田・川浦（2003）で作成された主観的幸福感尺度15項目を使用し、「非常に」から「全く～ない」までの４件法で回答を求め、順に４点から１点の得点を与えた。

（３）結果

１）調査協力者の属性

表２　性別 と 孫育て経験の分布（人）

	孫育て経験					合計
	孫はいない	していない	ほとんどしていない	少ししている	かなりしている	
男性	2	3	7	14	3	29
女性	8	6	7	17	4	42
合計	10	9	14	31	7	71

性別と孫育て経験でみると、表２のような分布となった。孫育てを「少ししている」者が31名（43.7%）と最も多く、次いでほとんどしていない者が14名（19.7%）と多かっ

た。半数以上の調査協力者が日常的な孫育てではなく、必要な時や孫が遊びに来る時などに孫育てをしていることが示唆される。なお、分布に有意な差は見られなかった（$\chi^2(4)=2.75$，p＝n.s.）。調査協力者全体では男女で人数の差があるが、それぞれ孫育て経験の分布が等しい事から、性別は問題とせず、すべてのデータを分析対象とし、孫育ての経験から分析をする。

経済状態について、「裕福だ」９名（12.7%）、「不自由はしない程度だ」45 名（63.4%）、「なんとか暮らしている状態だ」16 名（22.5%）、「とても苦しい」１名（1.4%）となっていた。ある程度余裕があり、経済的にも孫育てが可能な調査協力者が半数を占めていた。

２）孫育て意識

「孫が不自由なく暮らしている場合」、「孫の両親が共働きの場合」、「孫家庭が経済的に苦しくなった時」「孫が片親になった時」、「親の育児能力に不安がある時」それぞれの孫育ての意識を表３にまとめる。「孫が不自由なく暮らしている場合」、「孫の両親が共働きの場合」、「孫家庭が経済的に苦しくなった時」「孫が片親になった時」の４つの場面では、親が必要とすれば祖父母が関わるべきだと回答した者が最も多く、「親の育児能力に不安がある時」のみ、親が必要としなくても祖父母が関わるべきだと回答した者が最も多かった。

親の育児能力といった、孫の成育に関わるような場面では親が求めていなくても孫育てに関わる必要性を感じるが、基本的には親の意見を尊重しながら孫育てに関わろうとする姿がうかがえる。また、「孫が不自由なく暮らしている場合」や「孫の両親が共働きの場合」のように、孫家庭に特別問題がないと判断できる場面では積極的な介入をせず、親が必要とすれば孫育てに参加しようとする傾向が示唆される。

表３　孫育てに対する意識

	孫が不自由なく暮らしている場合		孫の両親が共働きの場合		孫家庭が経済的に苦しくなった時		孫が片親になった時		親の育児能力に不安がある時	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
関わる必要はない	7	(9.9)	2	(2.8)	3	(4.2)				
孫が必要とすれば	10	(14.1)	6	(8.5)	14	(19.7)	18	(25.4)	11	(15.5)
親が必要としなくても	2	(2.8)	7	(9.9)	14	(19.7)	18	(25.4)	30	(42.3)
親が必要とすれば	48	(67.6)	48	(67.6)	36	(50.7)	29	(40.8)	26	(36.6)
孫が必要とすれば／親が必要とすれば	3	(4.2)	4	(5.6)	3	(4.2)	2	(2.8)	1	(1.4)
孫が必要とすれば／親が必要としなくても			1	(1.4)			1	(1.4)	1	(1.4)
孫が必要とすれば／親が必要としなくても							1	(1.4)		
無回答			3	(4.2)	1	(1.4)	2	(2.8)	2	(2.8)
合計	71	(100.0)	71	(100.0)	71	(100.0)	71	(100.0)	71	(100.0)

３）親子関係得点

親子関係について質問した 10 項目（表４）について、杉山（2009）に従って、合計得点を算出し、親子関係得点を（α＝.788）算出した。親子関係得点は 50 点満点で、得点が高い方が親子関係がよいとなる。

表４　親子関係項目と平均値

	度数	最小値	最大値	平均値 (SD)
1．現在の子どもとの関係に満足している	53	1	5	4.25 (0.83)
2.子どもとは頻繁に連絡をとっている	53	1	5	3.68 (1.11)
3.子どもとは頻繁に会っている	52	1	5	3.27 (1.27)
4.子どもは自分に困ったことがあった時は、よいアドバイスをくれる	54	1	5	3.80 (0.92)
5.子どもは何かあると、自分に助けを求めてくる	54	1	5	3.50 (0.95)
6.子どもの存在は精神的な支えである	54	2	5	4.20 (0.81)
7.子どもは自分に何かあった時には、精神的な支えになってくれる	54	1	5	4.20 (0.83)
8.人間関係において、子どもとの関係は重要である	54	3	5	4.52 (0.61)
9.子どもとの思い出（エピソード）はよいものである	54	3	5	4.56 (0.60)
10.自分と子どもとは対等な関係である	54	2	5	4.22 (0.90)

本研究の親子関係得点は22点～50点で分布し、平均値は40.23（SD＝5.09）であった。表４の平均値からもわかるように、ほとんどの調査協力者が親子関係を肯定的に捉えていると言えるが、平均値で親子関係得点高群（27名）と低群（33名）に分類した。

４）主観的幸福感得点

表５　主観的幸福感項目との平均点

	度数	最小値	最大値	平均値 (SD)
1．あなたは人生が面白いと思いますか。	60	2	4	3.13 (0.39)
2．過去と比較して、現在の生活は	60	2	4	3.17 (0.49)
3．ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか。	60	2	4	3.15 (0.44)
4．ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか。	60	2	4	3.60 (0.53)
5．危険な状況（人生を狂わせるような）に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか。	60	2	4	2.85 (0.61)
6．今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる自信がありますか。	60	2	4	2.98 (0.50)
7．期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたいと思いますか。	60	1	4	2.68 (0.54)
8．これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか。	59	1	4	2.83 (0.50)
9．自分がやろうとしたことはやりとげていますか。	60	2	4	3.25 (0.47)
*10. 自分の人生は退屈だとか面白くないと感じていますか。	60	1	3	1.97 (0.64)
*11. 将来のことが心配ですか。	60	1	4	2.45 (0.62)
*12. 自分の人生には意味がないと感じていますか。	59	1	4	1.78 (0.72)
13. 自分がまわりの環境と一体化していて、欠かせない一部であるという所属感を感じることがありますか。	60	1	4	2.72 (0.61)
14. 非常に強い幸福感を感じる瞬間がありますか。	60	2	4	3.03 (0.52)
15. 自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じることがありますか。	60	1	4	2.73 (0.61)

＊は逆転項目を表す

主観的幸福感について質問した15項目（表５）について、伊藤ら（2003）に従って、

合計得点を算出し、主観的幸福感得点（α＝.834）を算出した。親子関係得点は 60 点満点で、得点が高い方が親子関係がよいとなる。本研究の主観的幸福感は 33 点～56 点で分布し、平均値は 44.67（SD＝4.57）であった。平均値で主観的幸福感の高群（39 名）と低群（31 名）に分類した。

５）孫育て意識に影響を与える要因

親子関係の認知と主観的幸福感で孫育て意識に違いがあるか検討する。親子関係得点と主観的幸福感得点の高低で図３のような４群に分類した。親子関係得点も主観的幸福感も高群の生活満足群は 16 名。親子関係得点が高群で主観的幸福感が低群の親子関係満足群９名。主観的幸福感が高群で親子関係得点が低群の主観的幸福群が 18 名。親子関係得点も主観的幸福感も低群の気がかり群が 16 名となった。

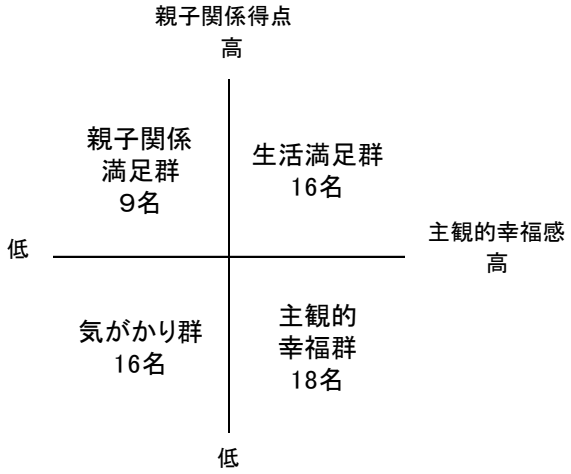

図3 親子関係得点と主観的幸福感による4群の分類

この４群で５つの場面の孫育て意識の人数の分布をみた。なお、孫育て意識の質問において、複数の選択肢を選んだ者はこの分析から除外した。

表６ 孫が不自由なく暮らしている場合の回答分布

	気がかり群	親子関係満足群	主観的幸福群	生活満足群	合計
関わる必要はない	0	2	2	1	5
孫が必要とすれば	3	0	3	1	7
親が必要としなくても	0	0	1	1	2
親が必要とすれば	12	7	10	12	41
合計	15	9	16	15	55

孫が不自由なく暮らしている場合では、どの群も親が必要とすれば孫育てが必要とする回答が多く（表６）、有意な差はみられなかった（$\chi^2(9)=8.26$, n.s.）。親が必要としなくても孫育てをする必要があると回答した者は主観的幸福群と生活満足群に属する２名で、どちらも主観的幸福感が高群の者であり、自身の生活の満足感があるがあることが孫の暮らしに目を向ける要因のひとつとなる可能性が示唆される。

表７ 共働きの場合の回答分布

	気がかり群	親子関係満足群	主観的幸福群	生活満足群	合計
関わる必要はない	0	0	1	1	2
孫が必要とすれば	2	1	0	0	3
親が必要としなくても	3	1	0	1	5
親が必要とすれば	9	6	14	13	42
合計	14	8	15	15	52

親が共働きの場合でも、どの群も親が必要とすれば孫育てが必要とする回答が多く（表７）、有意な差はみられなかった。（$\chi^2(9)=10.12$, n.s.）。関わる必要がないと回答した者は主観的幸福群と生活津満足群に属する２名であり、孫が必要とすれば孫育てをする必要があると回答した者は気がかり群と親子関係群に属する３名である。

前者の２名はどちらも主観的幸福感が高群の者であり、後者３名はどちらも主観的幸福感が低群のものである。ここでも主観的幸福感が判断のひとつの要因になることが示唆される。

表８　経済的に苦しくなった時の回答分布

	気がかり群	親子関係満足群	主観的幸福群	生活満足群	合計
関わる必要はない	0	1	0	1	2
孫が必要とすれば	3	3	2	1	9
親が必要としなくても	4	1	5	3	13
親が必要とすれば	8	4	9	10	31
合計	15	9	16	15	55

経済的に苦しくなった場合でも、どの群も親が必要とすれば孫育てが必要とする回答が多く（表８）、有意な差はみられなかった（$\chi^2(9)=7.27$, n.s.）。

表９　片親になった時の回答分布

	気がかり群	親子関係満足群	主観的幸福群	生活満足群	合計
孫が必要とすれば	5	4	2	3	14
親が必要としなくても	3	4	5	4	16
親が必要とすれば	7	1	9	6	23
合計	15	9	16	13	53

片親になった場合でも、どの群も親が必要とすれば孫育てが必要とする回答が多く（表９）、有意な差はみられなかった（$\chi^2(9)=6.57$, n.s.）。

表10　育児能力に不安がある時の回答分布

	気がかり群	親子関係満足群	主観的幸福群	生活満足群	合計
孫が必要とすれば	3	2	1	2	8
親が必要としなくても	4	4	12	3	23
親が必要とすれば	7	3	4	10	24
合計	14	9	17	15	55

親の育児能力に不安がある場合では、主観的幸福群で親が必要としなくても必要と回答した者が多かったが（表９）、全体としては有意な差はみられなかった（$\chi^2(9)=11.14$, n.s.）。主観的幸福群で親が必要としなくても孫育てが必要だと回答する者の割合が高かったことから、ここでも主観的幸福感の高さが孫育て観に影響を与えることが示唆される。一方で、主観的幸福感も高群で親子関係得点も高群の生活満足群では、親が必要とすれば孫育てをすると回答する者の割合が高く、親子関係を含む自身の生活の満足度が孫育て観の高さに直接影響していないことも示された。

（４）考察

本研究では、孫育てに対し、「親が必要とすれば必要だ」と考えられており、手や口を積極的に出すという意識は見受けられず、基本的には親の意見を尊重しながら孫育てに関わろうとする姿がうかがえた。特に、「孫が不自由なく暮らしている場合」や「孫の両親が共働きの場合」のように、孫家庭に特別問題がないと判断できる場面では積極的な介入をせず、いずれの場合も親が必要とすれば孫育てに参加しようとする傾向がみられた。孫に興味関心があるものの、孫は自身の子どもの子どもであり、孫育ては「子どもへの援助」の側面が強いのではないかと考える。親として、子どもに頼まれたらやってあげたい、子どもを尊重してあげたいという「子を想う気持ち」のひとつの形が孫育てと言える。

孫育て意識を予測する変数として親子関係と主観的幸福感を取り上げたが、明確な傾向は得られなかった。本研究の調査協力者はいずれの変数も高め値を示し、サンプルに偏りがあったことがひとつの要因として考えられる。しかし、回答の分布から親子関係よりも主観的幸福感の方が孫育て意識に影響を与えることが予測された。経済的余裕と人間関係の円滑さ、主観的幸福感が高い者は結果として自らの生活に余裕ができるため、Generativity の課題を解決する余裕が生まれ、孫育て観も高くなると仮説を立てたが、「生活満足群」が特別積極的とは言えず、この仮説を支持する結果は得られなかった。主観的幸福感が高いということは、趣味があって自分のために使う時間が充実しており、社会の一員としての役割もあるということである。つまり、視野が広く、孫育て＝家族の世話以外のことにも多くのエネルギーを注ぐ場面があるため、必要以上の関心を持っていないと考える。また、親子関係もよいということは、孫世帯とのコミュニケーションと取れており、何かある場合は頼られる存在であるという意識があるため、祖父母から積極的な介入をする必要がない状態であることも考えられる。ある程度の生活の余裕が孫育てには必要であろうが、充実している者ほど自身の生活と子ども世帯の生活を尊重しているため、単純に積極的な姿勢とはならないと考える。なお、本研究の調査対象は孫育てをしている者としていない者どちらも含まれている。したがって今回の結果は日本の祖父母世代の一般的な考え方と捉えることができるだろう。

しかしながら、今回経済的余裕については余裕のある回答者が多く、回答が偏っていたため、分析することができなかった。この点は今後の課題としたい。

７．まとめ

本研究では、以下の点が明らかになった。

①子育て世代の子育ての疑問は具体的で場面を限定したものが多く、一般的な解決策ではなく、自分に合った情報を得たいという傾向がうかがわれる。

②したがって、“タマゴ育て”といった、地域の祖父母が支援者となってじっくりと関わる機会を設けることは子育て世代の支援となりうる。

③孫育てには主観的幸福感が一定の影響を与えている可能性が示されたが、主観的幸福感の高さが単純に孫育て意識を高めているわけではなかった。

④祖父母世代の孫育て意識は、子どもの援助の一環であり「親が必要とすればする」という意識であり、孫に関心は持っているものの、親の意見を尊重する立場を取っている。

注　この研究の研究１は NHK 学術トライアルを利用して行った。

引用文献

Erikson,E.（1950）Childhood and Society. New York:W.W.Norton.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至（2003）：主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討，心理学研究，74（3），276-281.

北村安樹子（2008）：子育て世代のワーク・ライフ・バランスと“祖父母力”－祖父母による子育て支援の実態と祖父母の意識－，Life Design Report（2008 年 5-6 月号），16-27.

厚生労働省（2016）：国民生活基礎調査　https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html（2019.9.18）

久保恭子・田村毅（2011）：祖父母力を活用した育児支援のあり方の検討，東京学芸大学紀要総合教育科学系，62（2），257-261.

森田麻記子（2017）：シニアの社会参加としての子育て支援－地域のシニアを子育て戦略として迎えるための一考察－，富士通総研（FRI）経済研究所研究レポート No.441.

内閣府（2019）：令和元年版高齢社会白書　https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf_index.html（2019.9.18）

NHK『すくすく子育て』：（2006.8.19 放送「どうつきあう？じぃじ　ばぁば　世代～子育て支援の新しい形～」）

NIKKEI STYLE　2014 年 2 月 19 日版：「他人の孫＝たまご」育てに活躍
https://style.nikkei.com/article/DGXBZO66994700Y4A210C1WZ8000/（2019.9.18）

小野寺理佳（2004）：別居祖父母へのヒアリングデータにみる孫育ての悩みと求められる支援，社会保障研究，166-176.

杉井潤子・泊祐子・堀智晴・早川淳・又賀淳（1994）：祖父母・孫関係に関する研究（第３報）：「孫育て」にみる祖父母の位置づけおよびその主観的評価，大阪市立大学生活科学部紀要，42，141-153.

杉山佳菜子（2010）：成人子とその親子関係－子世代からみた老親扶養意識を中心に－，老年社会科学，31（4），458-469.

山崎美佐子・草野篤子（2002）：祖父母と孫に関する研究，日本家政学会第 54 回大会論文集，83.

こども教育学部こども教育学科　sugiyamak@suzuka-jc.ac.jp

鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学・社会科学編 第 3 号 2020

The Potentiality of the Regional Support for Grandparents Rasing Grandchildren：
Examination into the Parent-Child Relationship and Well-Being

Kanako SUGIYAMA , Mayuko OGAWA , Itsuko SAKAKIBARA

Abstract

This study has two investigations. The 1st study examines parents' troubles of parenting by TV program. It's shows necessity of the grandchild bringing up as the parenting support by the area. The 2nd study examines 71 grandparent that generations participated in the study. As a result most grandparent generations have the thought that bringing grandchild up should be done when the parent of the grandchild needs it. In addition, well-being may have an impact on grandchild bringing up.

Keywords：Grandchild bringing up, Parent-child relationship, Well-Being, Grandparent generations, Parenting support